

Ⅲ 第3次「銀の馬車道」活用推進計画

1 基本方針

「銀の馬車道プロジェクト」は、第1次、第2次計画に基づき、種々の事業を展開してきた結果、計画の所期の目的である地域住民の理解や浸透が進み、次のステージに進む地域内在的なエネルギーが満たされている。

第3次計画の初年である平成28年（2016年）は、明治9年（1876年）の「銀の馬車道」完成より140周年を迎える節目の年である。

さらに、今後、認定をめざしていく「日本遺産」（文化庁）の認定を受ければ、「近代化産業遺産」、「プロジェクト未来遺産」とあわせてトリプル遺産達成となる。

プロジェクトを推進するうえで、活動の大きな励みになるとともに、「銀の馬車道」のブランドイメージ向上にもつながる。

一方、国内の知的好奇心が旺盛な中高年世代や、ゴールデンルートを観光済みの外国人旅行者の誘客には、地域のストーリーを巡る広域観光ルートの設定が求められている。計画の最終年である平成32年（2020年）には東京オリンピック、パラリンピックが開催され、その翌年には関西ワールドマスタースゲーム2021が予定されている。

「銀の馬車道」の魅力を国内外へPRする絶好の機会となることから、広域的なインバウンド対策を現時点から準備し、姫路城、城崎温泉を訪れる訪日外国人旅行者の当地域への誘客を図ることが必要である。

今、地方創生が叫ばれるなか、地域外の人々に見てもらうということを意識することで、地域活動を活発化し、「銀の馬車道」の意義を再認識することが必要である。

以上のことから、第1次、第2次計画の推進による成果と課題をふまえながら、今後5年間の基本方針としては、「銀の馬車道」をブランド化し、地域外に発信することによって「銀の馬車道」をめざして地域外から訪れる人々の増加（誘客）と、それによってもたらされる地域経済の好循環をめざすこととする。

2 「銀の馬車道」プロジェクトの展開

第3次計画を推進するにあたっては、基本方針に則り、次の3つの柱に基づきプロジェクトの展開を図る。

特に、これからの5年間は、「銀の馬車道」が地域住民の誇りとなるよう、「銀の馬車道」のヘリテージ（遺産）としてのレベルアップを図る。

その上で、2つ目の柱である「地域外からの誘客増加をめざした取組の推進」

に重点を置き、観光を意識した事業を戦略的かつ計画的に実施し、中播磨地域の経済の活性化につながるよう、その取り組みを進める。

〔プロジェクト展開の3つの柱〕

- (1) ヘリテージとしてのレベルアップ
- (2) 地域外からの誘客増加をめざした取組の推進
- (3) 銀の馬車道“愛”の醸成

また、このプロジェクトの推進にあたって、地域外に説明できるテーマやストーリーを設定し、より強固で広がりのあるイメージを確立する。

まず、歴史や景観、文化の重層性を持つ「銀の馬車道」のテーマを以下のとおり設定する。

〔テーマ〕

銀の馬車道 一時空を超えて巡る輝きの道ー 生野から飾磨へ

ストーリーについて、これまで「銀の馬車道」は、明治初期に道が整備された背景を中心に発信してきた。

今後は、姫路城、竹田城も含めた戦国時代からの歴史的背景や、「鉱石の道」にもゆかりのあるフランスとの交流に係るストーリー、また、「銀の馬車道」に取って替わった播但鉄道の敷設という流通の大革命も含めた幅広い歴史を発信し、魅力向上を図る。

また、歴史をなぞるだけでなく、そこに関わった人々の輝きを巡る旅を提案する。

〔重点ストーリー ～人々の輝き～〕

中世／生野銀山を守る竹田城、秀吉の姫路城を拠点とした但馬攻め
近代／フランス人技師：シスレーによる生野鉱山寮馬車道の建設ドラマ
内藤利八、浅田貞次郎が民主導で播但鉄道を開設
現代／国道、県道に姿を変えた銀の馬車道沿いでがんばる人々

(1) ヘリテージとしてのレベルアップ

① 沿線各地域と「銀の馬車道」との関わり調査

「銀の馬車道」については、生野鉱山と姫路（飾磨津）すなわち起終点周辺ではその関わりや史実が種々の資料から明らかとなっている。

しかし、「銀の馬車道」の中間地域である神河町、市川町、福崎町では、「銀の馬車道」と地域の関わりが明らかではないと指摘されている。

そこで、関連文化財の調査や各地域の市史や町史の編纂時の資料分析・文

献調査、郷土史家へのヒアリング等をさらに進める。

各地域に現存する資源と「銀の馬車道」との関わりを明らかにすることで、各地域の「銀の馬車道」のストーリー構築を期待できる。

＜具体的な取組例＞

- ・ 現存する「銀の馬車道」（神河町川原池付近）の発掘調査
- ・ 沿線市町の市史や町史等の「銀の馬車道」に関する文献調査や沿線周辺の聞き込み調査の実施
- ・ 「銀の馬車道」に関する資料や写真の募集キャンペーンの実施
- ・ 「銀の馬車道」サブストーリー（スピンオフ）の構築及び情報発信

② 「生野鉱山」及び「銀の馬車道」の日本遺産認定

飾磨津から生野鉱山を結ぶ「銀の馬車道」と「鉱石の道」の日本遺産認定をめざす。

＜具体的な取組例＞

- ・ 姫路市、神河町、市川町、福崎町、養父市、朝来市による日本遺産認定申請に向けた取り組みへの協力：ストーリー作成への助言、文化財一覧表作成のための資料・写真等の提供 等
- ・ 認定後の地域活性化計画を推進する体制への協力

③ 「銀の馬車道」の国史跡指定

現存する「銀の馬車道」（神河町）や修築碑などの歴史的事物について、「銀の馬車道」全体の中でそれぞれ国指定史跡をめざす。

＜具体的な取組例＞

- ・ 史跡調査への協力、各種情報提供
- ・ 教育委員会との連携による「銀の馬車道」の文化財としての活用検討

(2) 地域外からの誘客増加をめざした取組の推進

① 「銀の馬車道」のブランド戦略の推進

「銀の馬車道」のブランド力向上を図るため、「銀の馬車道ブランド戦略」を立案する。

従来のロゴマークやキャラクターは、子どもをはじめとした地域住民への理解や浸透を目的としたものだった。

今後、地域外や海外でも通用するデザインで、観光客の目を奪い記憶に残るロゴマークを制作する。

また、旅行者が「銀の馬車道」のストーリーを思い浮かべながら49kmの旅を楽しむための「見る（ストーリーの見える化）」の具体的方策や、「銀の馬車道」をキーワードとする「食べる」・「買う」・「泊まる」の統一デザイン化など、デザイン及び販売戦略の総合提案を行う。



ロゴマーク、キャラクター
(H19 制定)

<具体的な取組例>

- ・ インフルエンサー（著名なデザイナー、戦略アドバイザー）を選定し、戦略を立案

〔検討項目〕

ア ターゲットの設定

【想定】

(ア) 国内

知的好奇心が旺盛で、人生にゆとりがある中高年世代

(イ) 海外

➤ 欧米

1週間程度でじっくり歩いてみようという人

※ 特に「銀の馬車道」にゆかりがあるフランスへの情報発信に取り組む。

➤ 東南アジア タイ等の個人客

➤ 中国、台湾 団体客（リピーター）

イ 新ロゴマークの制定

ウ 世の中に響く仕掛けを定めた「銀の馬車道ブランド戦略」の立案

- ・ 戦略の具体化

ア 「見る（ストーリーの見える化）」の具体的方策

<例>道路標識、銀の馬車道交流館等の関連施設の統一デザイン、WEBサイト、ポスター等

イ 「食べる」・「買う」のデザイン方策

<例>「銀の馬車道」登録商品の販売戦略の策定（商品パッケージのデザイン、店舗ディスプレイ、POP・商品陳列等への助言、PRイベント等）

ウ 「泊まる」の統一販売戦略

<例>沿線宿泊施設の宿泊部屋の一室を明治風・フランス風にデザイン化

② 「見る（ストーリーの見える化）」の強化

ア 「銀の馬車道」主要観光ポイントの発信強化並びにガイド施設（ステーション）の整備

地域外から「銀の馬車道」への誘客を進める際のおすすめポイントとして、「銀の馬車道」の起発着点である生野銀山、姫路城、飾磨港をシンボリックなイメージ拠点と位置づけ、該当地域と連携しながら、PR強化を図る。



生野銀山



姫路城

さらに、神子畑選鉱場跡、明延鉱山等の知る人ぞ知る観光資源を有する「鉱石の道」とストーリー性をもった連携を強化する。

また、沿線各市町のゆかりの施設は、「銀の馬車道」のガイダンス機能、休憩機能、特産品販売機能、必要に応じて飲食機能などをもつ施設「銀の馬車道ステーション」として整備する。



神子畑選鉱場跡

＜主な整備候補場所＞

- ・ 朝来市：井筒屋
- ・ 神河町：大黒茶屋、銀の馬車道交流館
- ・ 市川町：市川町観光交流ステーション
- ・ 福崎町：柳田國男生家及び周辺施設
- ・ 姫路市：JR姫路駅、みなとミュージアム

イ 「銀の馬車道」の楽しみの創出

(ア) 「銀の馬車道」交流ゾーンの形成

観光客が「銀の馬車道」の歴史に触れたい、撮影してSNS等で発信したいと思える観光スポットの整備を進める。将来的には、沿線各市町において「銀の馬車道」交流ゾーンの形成を行い、姫路城をはじめとして、国道312号線を巡って「銀の馬車道」を楽しむ広域観光の各地域の拠点とする。

＜具体的な取組例＞

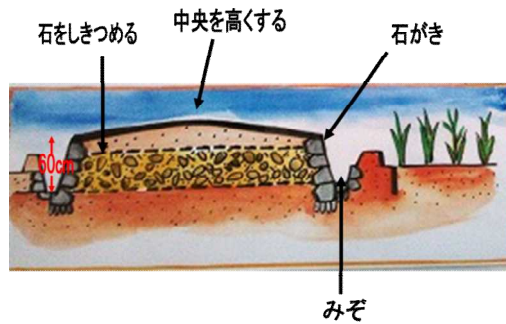
- ・ マカダム式舗装道の復元
- ・ 記念撮影スポットの整備
- ・ 散歩道の創出

＜重点整備箇所＞

- ・ 神河町吉富88-10の県チェーン脱着場：現大黒茶屋前
 - ※ 現存する「銀の馬車道」のうち、最も昔の面影を残している神河町川原池付近に隣接しており、誘客の相乗効果が期待できる。



現存する「銀の馬車道」（神河町川原池付近）



マカダム式道路構造（池谷春雄氏作成）

(イ) 体験できる「銀の馬車道」の創出

「銀の馬車道」交流ゾーンを中心に、沿線各市町の地域の人々が、「銀の馬車道」をキーワードに観光客をおもてなしする体制を整える。

<具体的な取組例>

- ・ ガイドと歩くまち歩き
- ・ マカダム式工法に関する記述（生野銀山行業ノ景況 日本鉱業史料集刊行委員会 編）
- ・ 馬車の運行
- ・ 「銀の馬車道」に関連した物語ツアーなど着地型プログラムの開発

ウ バラを通じたフランスとのお洒落な交流の拡大

「銀の馬車道」は、西洋の文化や東京や大阪、京都など都市の文化、近代的な鉱山技術・様式などをこの地にもたらした。その中でもフランスとは深い縁で結ばれている。

「銀の馬車道」を指導したレオン・シスレー、鉱山技術を革新したジャン・フランソワ・コワニエ達は、その婦人や子どもを含めてこの地に大きな影響を及ぼしたと考えられる。

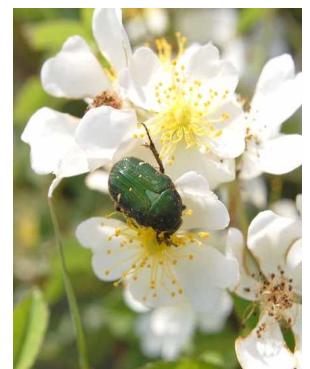
マカダム式工法で「銀の馬車道」を築造したシスレーは、当時生野に自生していたノイバラの種を母国フランスの園芸家だった父に送り、その後育苗の名手ギョー家により品種改良されながら日本由来のバラとしてフランスで親しまれている。

このようにバラは、フランスと「銀の馬車道」の深い繋がりを象徴するものであり、他の地域にはない「銀の馬車道」独自のものである。

現在、特定非営利活動法人いくのライブミュージアムなどを中心にノイバラの植栽活動が続けられている。

また、姫路日仏協会がフランスのバラ育種家ドミニク・マサド氏に依頼して新種のバラ「銀の馬車道」を開発予定である。

このような活動を支援し、「銀の馬車道」沿線のすべての



ノイバラ

市町に拡大することによって、フランスとの絆の道「銀の馬車道」として誘客を進める。

さらに、バラやフランス料理を活かすことで「銀の馬車道」から距離のある観光資源をフランスと結びつけ、「銀の馬車道」物語の一つとして位置づける。

＜具体的な取組例＞

- ・ 沿線市町へのバラ植栽活動の協力依頼
- ・ ホテルリラクシア等にバラ園の整備やジビエ料理等への協力を依頼
- ・ シスレーのバラロードの整備・情報発信

エ 人がはばたく「銀の馬車道」（偉人調査）

「銀の馬車道」は、生野鉱山の近代化や道の修築に尽力した朝倉盛明やフランス人をはじめ、五代友厚や高島北海など多くの偉人が行き交った道である。時代を超えて国内外から時代をリードし支えた人々が行き交った。

そして柳田國男、原六郎、内藤利八など多くの偉人が「銀の馬車道」を通して世に羽ばたいた。

これらの人々を一堂に会し、人々の功績や「銀の馬車道」との関連性を紹介、展示することで、「銀の馬車道」に新たな魅力を加えることができる。

そのために、これらの人々の足跡や人物像をより詳細に調査を行うことが必要である。

＜具体的な取組例＞

- ・ 沿線市町の市史や町史等の「銀の馬車道」に関する文献調査や沿線周辺の聞き込み調査の実施（再掲）
- ・ 「銀の馬車道」サブストーリー（スピンオフ）の構築及び情報発信
- ・ 展示手法や情報発信等の検討

③ 「食べる」の強化 ―「銀の馬車道」グルメ街道―

ア コラボ料理の開発

銀を飾磨津で荷下ろしした後、播磨灘の魚が「銀の馬車道」を北に遡っていったとのストーリーを立て、家島の海の幸、神河町のゆず、福崎町のもちむぎ等、沿線の食材がコラボしたグルメを開発する。

＜具体的な取組例＞

- ・ J Aや漁業協同組合と連携した沿線農水産物の飲食店への普及
- ・ 家島ハモの神河ゆず味噌のせ等のコラボメニューの開発

イ メイン料理の開発



明治初頭、生野では牛肉は手に入りにくかったため、シスレーはじめフランス人は、牛肉の代わりに猪肉を食したと言われている。

牛肉のかわりに食材とした猪肉や鹿肉を用いたフランス料理（ジビエ料理）を「銀の馬車道」にゆかりのお洒落な食として提供する取り組みを進める。

＜具体的な取組例＞

ジビエ料理

- ・（一社）兵庫県猟友会姫路支部（夢咲鹿工房）との連携

ウ 「銀の馬車道」スイーツ、おやつの開発

姫路市船津町八幡遺跡（弥生中期から後期）からソバの実が出土している。ソバを栽培し食用としていたと考えられる。

ソバ粉を使ったフランス北部の郷土料理にガレットがある。そこで、「銀の馬車道」産のそば粉を使用したガレット等を「銀の馬車道」とフランスの生活文化を結ぶ食として提供する取り組みを進め、新たなフランスとの交流を積極的に発信する。



ガレット

＜具体的な取組例＞

- ・ 商工会等と連携し、「銀の馬車道」グルメ街道の推進
- ・ 「銀の馬車道マルシェ」「銀の馬車道おやつコンテスト」の拡充
- ・ もち麦粉のガレットの開発

④ 「買う」の強化

「銀の馬車道デザイン戦略」を基に、現在150商品以上が登録されている「銀の馬車道」認定商品についてさらに掘り起こしを行うとともに、③で開発されたメニューと一体的な販売プロモーションを行う。

地元事業者が自ら考え運営していく仕組みを構築し、課題共有を行いながら、地域外の人々に来てもらう事業を企画、実施することで経済循環を生み出す。

＜具体的な取組例＞

- ・ 商品パッケージのデザイン、店舗ディスプレイ、POP・商品陳列等の統一
- ・ 「銀の馬車道」グルメ街道・おみやげマップの発行
- ・ PRイベントの実施

⑤ 「泊まる」の強化

「銀の馬車道」の地元への経済波及効果を高めるためには、沿線地域が発信する着地型観光が基本となる。着地型観光は、地域をじっくり体験・交流

するために宿泊滞在型観光への移行が必要である。

したがって、「銀の馬車道」沿線各地域での宿泊受け入れ体制の整備が求められる。

地域の公共宿泊施設の積極的活用を推進するほか、古民家活用も含めた宿泊体制に関する研究を進める。

また、旅行会社との連携、プログラムの開発等を進める。

＜具体的な取組例＞

- ・ 公共宿泊施設のゲストハウス化
- ・ 古民家ホテル開設の研究
- ・ 宿泊者が朝や夜に楽しめる観光商品づくり

⑥ 「物語」を巡る広域観光ルートの形成

知的好奇心が旺盛な国内の中高年世代や、ゴールデンルートを経験した外国人旅行者の誘客には、地域のストーリーを巡る広域観光ルートの設定が求められている。

姫路城は平成5年12月世界遺産に登録され、平成の大修理を終えた平成27年度は270万人を超える来場者があった。姫路は国内外を問わず多くの観光客であふれている。

また、朝来市の竹田城跡は「天空の城」として人気を博し、豊岡市の城崎温泉は外国人旅行者が急増している。

姫路城と竹田城跡、城崎温泉をつなぐ広域観光ルートとしての飛躍が期待される「銀の馬車道」について、「Himeji Castle—Gin No Bashamichi—Kinosaki Onsen」としてルートを形成し、大河内高原、家島等の管内観光資源も活用したツーリズムエリアを確立する。

＜具体的な取組例＞

- ・ テーマ設定によるルート創出
- ・ ルートの魅力と詳細なアクセス方法等を掲載したパンフレットの制作、WEBサイトでの発信
- ・ 2次交通も含めた「銀の馬車道」ルートパス等の研究、事業者への働きかけ

＜物語の例示（詳細は参考資料）＞

● 鉾山物語

「銀の馬車道」の中心の物語は鉾山にまつわる物語である。

中世からの歴史ある生野鉾山を中心とした鉾山群は、幾重にも時代を積み重ねた姿で現在も私たちの前にある。

かつて鉾山で働く男達とそれを支えた女達、そして鉾山開発を技術や経済力で支えた人々の生き様や遺構を時空を超えて想像する旅物語。

[主な観光資源] 史跡生野鉾山、明延鉾山、神子畑選鉾場跡 等

● 風景物語

「銀の馬車道」が象徴する生野鉾山から飾磨津までの沿道各地は、中世から現代まで時空を超えた重層性をもった地域であり、その時々を垣間見ることができる。

それぞれの時代に生きた人々や地域の生活が息づく風景をとおして、それぞれの時代や空間にトリップする旅物語。

〔主な観光資源〕

生野の鉾山町のまち並み、鉾山関連施設、神子畑の旧異人館、神河町栗賀のまち並み、市川町屋形のまち並み、福崎町の旧家三木家、明延の鉾山町のまち並み、姫路市の飾磨港のまち並み 等

● 道物語

「銀の馬車道」は、生野鉾山から飾磨津までの日本最初的高速産業道路である。現在もその痕跡や関連する遺産が各地に遺されている。

中世から生野鉾山と姫路を結ぶ輸送経路は確立されていたが、明治政府はさらなる輸送力の増強を企図し、専用道路「生野鉾山寮馬車道」（銀の馬車道）を新たに建設する。朝倉盛明とフランス人技師により建設された碎石による路体と舗装をもつマカダム式道路は、明治初期においては画期的であった。河川を渡る場合にはすべて橋を架け、橋梁にも最新の技術が導入された。オリジナルの「銀の馬車道」は、県道や国道に姿を変えているが、飾磨津から生野までの約49kmに加え、生野から神子畑までの「鉾石の道」ゆかりの遺産をゆっくり巡る道の旅物語。

〔主な観光資源〕

生野のトロッコ道、盛明橋、日本最古の神子畑鋳鉄橋、羽淵鋳鉄橋、神河町に現存する「銀の馬車道」、銀の馬車道交流館、市川町の屋形橋、福崎町の巖橋、姫路市の馬車道修築碑、生野橋、飾磨津物揚場跡 等

● 鉄道物語

「銀の馬車道」は明治9年から明治29年までの20年間、生野鉾山と飾磨津を結ぶ大動脈として活躍したが、生野鉾山の隆盛により鉾山関係物資の流通量が増大し、馬車での運搬では対応できなくなっていった。

そこで、馬車に代わり馬車鉄道が検討され、最終的には蒸気機関車による鉄道（播但鉄道）が実現する。

播但鉄道は、明治28年（1895年）飾磨港駅から姫路駅を経て生野駅間が開通した。飾磨港駅－姫路駅間は飾磨港線と呼ばれていた。

播但鉄道は現在では姫路駅と和田山駅を結ぶJR播但線として地域住民

や、沿線地域を訪れる人々の交通手段として、生き続けている。

また、鉱山物資の運搬手段としてトロッコが活躍した。生野鉱山や明延鉱山では、町中をトロッコ電車が走り、鉱山町の特徴づけるものであった。同時に明延鉱山では、「一円電車」という呼び名で地域住民の交通手段として親しまれた。

これは鉱山にまつわる鉄道の旅物語である。

〔主な観光資源〕

J R 生野駅、J R 和田山駅機関庫、J R 播但線ラッピング電車、一円電車 等

● 偉人物語

「銀の馬車道」は多くの偉人が行き交った道である。生野鉱山や周辺鉱山の開発のため、海外からも国内各地からも時代をリードし支えた人々が行き交った。

また、「銀の馬車道」沿道各地域からは、多くの偉人を輩出している。

これも、「銀の馬車道」を通った新しい文化や文明に触発され、広く世界とつながったことによると考えられる。

生野鉱山の隆盛に関わった人々、「銀の馬車道」に関わった人々、「銀の馬車道」を通して世界に羽ばたいた人々、「銀の馬車道」沿道の文化や生活に関わった人々等、「銀の馬車道」はまるで銀を製錬するルツボのように多くの偉人のルツボであったろう。

広く海外とも交流のあった道であるからか、進取の気性に富んだ人々が様々な分野で活躍している。この国をリードしてきたこれらの人々の足跡や生い立ちの物語をゆったり巡る旅物語。

〔ゆかりの偉人〕

朝倉盛明、五代友厚、ジャン・フランソワ・コアニエ、レオン・シスレー、原六郎、内藤利八、浅田貞次郎、柳田國男、和辻哲郎、白瀧幾乃助、和田三造、青山熊治、志村喬、橋本忍 等

● 花物語

「銀の馬車道」は、豊かな自然に縁取られた道である。

その中で沿道には四季折々に咲く花々の物語がある。小さな花々の小さな物語に「銀の馬車道」をゆっくり歩きながら出会う旅物語。

特にバラの花は「銀の馬車道」ゆかりの花としてこの地域を彩る。

〔主な観光資源〕

シスレーゆかりのノイバラ、ヒカゲツツジ、ハクサンハタザオ、各地の桜や紅葉、砥峰高原のハナショウブ、ススキ、応聖寺のナツツバキ、石川町の葉ボタン 等

● 城物語

中世から近世、時の為政者達は生野銀山の豊かな銀を求めた。そして生野銀山を支配するために城が重要な役割を果たした。

赤松氏、山名氏、太田垣氏これらは播磨・但馬の支配者として生野銀山を治めようとし、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康もまた天下の財政基盤のために生野銀山や周辺鉱山を支配しようとした。

これは、生野銀山にまつわる為政者達の城の旅物語である。

[主な観光資源]

姫路城、生野城、竹田城 等

⑦ 移動手段の整備

「銀の馬車道」にまつわる物語はいくつものテーマ性を持ち、テーマに沿って広域的に移動することで、それぞれの地域を実感することができる。

広域的に「銀の馬車道」を楽しむためには、交通手段の整備が不可欠である。

広域を移動するためには公共交通機関の利用が便利であり、鉄道・バスの公共交通事業者との連携を積極的に推進する。

駅からの2次交通を用意し、公共交通機関と連携した情報提供を行うことで旅行者がスムーズに目的地まで移動することを可能にする。

<具体的な取組例>

- ・ 馬レンタサイクル、馬カーシェアリングの試験実施
- ・ レンタサイクル及びカーシェア・ステーションの構築（主要拠点及び主要鉄道駅を相互に乗り捨て可能な地域全体のレンタルシステムの構築）
- ・ 馬ジャンボタクシーの運行
- ・ 新ラッピングの電車運行
- ・ コミュニティバスとの連携



カーミン自転車（神河町）

⑧ 戦略的プロモーションの実施

マスコミや口コミで発信されやすい状況を作るため、ターゲットを中高年の国内観光客や欧米または日本への興味関心が高いタイなど東南アジアの外国人観光客に絞り込み、地域一体となったプロモーションに取り組む。

「馬」や「遺産」をキーワードにするなど、話題性、独自性を高め、国内外の旅行会社やマスコミ等が興味を引くコンテンツを検討し、積極的に働きかける。

<具体的な取組例>

- ・ 旅行会社向け素材集の作成協力



馬カーシェアリング（イメージ）

- ・ 旅行会社、マスコミ招聘ツアー
- ・ SNSを活用したキャンペーン
- ・ 海外旅行博への出展

(3) 銀の馬車道“愛”の醸成

これまで地域内での理解度や浸透を進めるため、各種団体・グループによる様々な活動を推進し、支援してきた。

しかし、依然として地域外の「銀の馬車道」の知名度が低く、新たな交流に結びついていないことから、地域内でもその活動は停滞の傾向を見せている。

地域の人々が「銀の馬車道」の意義を再認識するためには、「銀の馬車道」を地域外の人々に見てもらうという新たな視点が必要である。

そこに住む人々が「銀の馬車道」を深く理解し、地域外の人々に説明できるまでに成長することを目指し、引き続き各種団体・グループの活動を支援する。

「銀の馬車道」を盛り上げる人材、特に将来の主体になる子ども達に「銀の馬車道」の素晴らしさを伝えるため、今後も「銀の馬車道」を南北交流のシンボルとして位置づけ、活動のすそ野が広がるような取り組みを展開する。

<具体的な取組例>

- ・ 「銀の馬車道」人情喜劇劇団公演支援
- ・ 「銀の馬車道」イベント開催支援
- ・ 「銀の馬車道」フォトコンクール事業
- ・ 未来遺産「銀の馬車道」伝承事業（子ども向けパンフレットの作成配付）